

# 2026、はじまっています。



馬路村の新年は、走り初めからはじまります。「あけましておめでとう」の挨拶とともに、子どもたちや帰省中の若者たちなど久しぶりの顔も並び、まずはラジオ体操から。2キロから5キロのコースをそれぞれ体力に合わせて走りますが、特に走るのが好きというよりは社交の場としてみなが参加し、沿道の応援含め、村の新年を祝う行事となっている気がします。お正月だからといってダラダラと過ごすわけではなく、よいいドンと足並みそろえて一斉に新たな年をスタートするのも村ならではの走り初めと。走り初めとは別に1月中にはチームでタスキをつなぐ村民駅伝大会もあり、下は小学1年生、上は60代まで、幅広い年代が村の道を駆け抜けます。老若男女もちろん本気、「大人げない」も当たり前。農協や役場など村の事業所の精鋭たちが出揃う中、小学生チームが大奮闘。小さい体で本気の大人を跳ねのけ、なんと20年ぶりとなる優勝を果たしました。ようやくた、ようやくたの村のおんちゃんたちも大喜び。楽しい村の話題となりました。2026年、普段と変わらぬ馬路村がはじまっています。



# ゆず園工場。



先日、馬路村の有機農業に欠かせられない肥料『ゆず園』の製造現場を学ぶため、兵庫県の肥料工場を見学してきました。ゆず園を構成する各原料の説明も聞き、オーガニック原料だからこそ一層素材を厳選し肥料としての機能バランスをどう実現するのかが学びとなりました。この村独自の農業の形を模索していくためには、何を選択し、逆に何を選択しないのか、日々考えていくことが重要かもしれません。



## 編集後記

2月に開催された高知龍馬マラソンに私もランナーとして参加してまいりました。高知らしさが満載のコースでは、馬路村農協チームも『ごつくん給水所』と銘打ち、ごつくん馬路村を振舞うブースを構えランナーをおもてなし。29キロ地点という、ゆずが一体に染みわたるタイミングで補給したことで、なんとか無事ゴールまでたどり着きました。山菜とりに畑仕事に宴会にと、なにかと村の中で動きが出てくる活動的な春。毎日ゆずを取り入れエネルギーに変えて乗り切っていこうと思います。

令和8年 春  
発行  
馬路村農協

# うまいとら新聞

春の決まり事はあるかね。

# 山村留学生、

## 募集中。

馬路村ヤナセ小中学校では、自然の中でのびのびと暮らすことができる山村留学制度を平成9年より活用し、たくさんの方の山村留学生とともに暮らしてきました。現在募集中につき、田舎に興味のある方はぜひぜひ、お問い合わせください。  
「お問い合わせ先」馬路村役場 ヤナセ支所  
電話 0887・43・2211

## 馬路温泉

ツルツルのお湯です。  
ゆっくりすこやかにまませんか。  
宿泊やお問い合わせはこちら  
0120-44-2026



# は村の



## いたるところが宴会場。

村のあちらこちらに咲く桜の下では、テーブルが広げられ宴会場へと様変わり。道行く人にも「ちっと食べていかんかよ」と声をかけ、気づけば大所帯になっていることもしばしば。

山菜や葉わさび漬けなど、持ち寄った季節の産物が並び、馬路流の花見を彩ります。農協本所前の桜の木には職員たちが一日がかりで提灯を飾り付け、2週間ほどですが雰囲気のある夜桜会場に。

春から村にやってきた新人の歓迎会もだいたいが花見となりますが、山の夜は春といえどもまだまだ寒く、かなりの防寒対策が必要なものもあるのです。家の庭先の桜を楽しむ村民も多く、庭での宴会なども含めると、繰り広げられる春の宴は数知れず。夏や秋などおすすめの季節はありますが意外と春に馬路に来てみるのも楽しめるかもしれません。馬路村、桜の見ごろは4月初旬ごろです。



ふきのとうの芽吹きから告げられてくる馬路の春は、あれやこれやととにかく忙しさを満載。遠い昔から続く春の忙しさはDNAのように村民に刻まれておりますがその忙しさは特に苦ではない様子。街にはいつでも何でも手に入る便利さはあるかもしれませんが、馬路村ではそのような便利さはありません。だからこそ季節のものと自然のままに付き合い続ける暮らしが残り、村中が一斉に芽吹く春は11月のゆず収穫時とは違った忙しさがあるのです。たけのこ、タラの芽、イタドリ、わらび、葉わさび、多くの山菜たちや田んぼや畑、やらなければならぬことがたくさんあり、「忙しい」が喜びでもある馬路の春なのです。

## 剪定に誘引に。

暖かくなり根を伸ばすゆずに寄り添い、余分な枝を落とす剪定、木が高くなりすぎないように調整をする誘引、栄養を与える施肥など、春になるとゆず畑は大忙しとなります。化学系農薬は使用しないため、なるべく病気や害虫の影響を受けないような風通しのよい樹形づくりが欠かせられません。まだ少し寒さが残る日もあります、山の間からの陽光の下、パチンパチンと剪定バサミの音が響くゆず畑です。



## 家の横のたんぼ。

「米農家」というよりは家庭菜園に近い感覚かもしれません。自分らあの食べる分だけなので、そこまで広い必要もなく家の横に少しだけある田んぼもよく見かけ、田をおこし、水を引き、春になるとその小さな田んぼたちも装いを変えます。暖かくなってくるとソワソワと田んぼのことも頭がいっぱいに。



## 川の準備も欠かせられん。

3月から解禁されるアメゴ漁から安田川が動きはじめます。うなぎに鮎に、これからの忙しい川生活にむけ準備は万端。



## ホダギをつくる。

村の贅沢シリーズのひとつ「原木しいたけ」。そのしいたけを生やすホダ木づくりに村大工の恭にいがとりかかっています。元となる木にドリルで穴を開け、そこに菌を打ち込んでいきます。そして雨のあたる場所にホダ木を移しておけば、原木しいたけがニョキッと顔を出すわけですが、こうして自らホダ木までつくるのも恭にいならではの。たくさんホダ木があつという間に出来上がっていきますが、そんなに食べられるのかと心配になるほどとにかく大量のホダ木。

そのまま焼いたり味噌汁に入れたり「まあなんにでもよ」と食卓のあらゆる場面で原木しいたけは登場すること、いらぬ消費の心配だったようです。「できたら持っていっちゃんわ」と楽しみがひとつ増えた道すがらでした。



## 当たり前のイタドリ。

イタドリを見るのとポキッと採らなければならぬ。それが村の当たり前。味が美味しいとか誰かに食べさせたいとか、そういうことではなく、とにかくとにかく、採らなければならないのです。



## つくしんぼ。

春の訪れをわかりやすく教えてくれる象徴的な存在は、村の河原などにもポツポツと生え、村の中では佃煮などで食す人もおられます。見た目のかわいさからか、村の保育園児たちもこぞって採り、子どもには一番親しみのある村の山菜かもしれませんね。「発見＝収穫」と見つけた瞬間忙しさを連想させる山菜とは違い、村の中でも春をほっこりと教えてくれる存在です。

